

# TRIAL &

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

# ERROR



[ 特集 ] 若者のリアルボイス

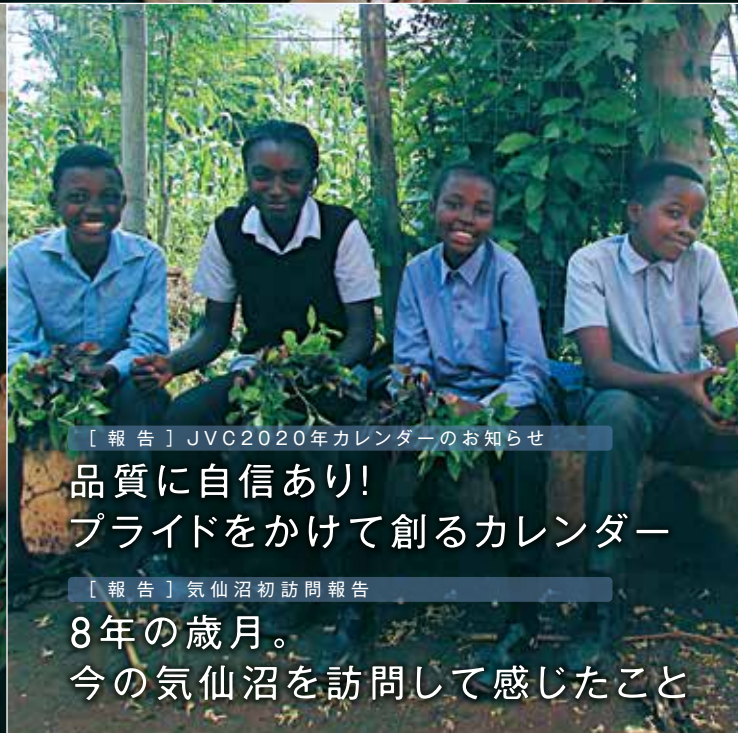
JVC事業地から、  
若者の本音を聞いた

[ 報告 ] 朝鮮民主主義人民共和国出張報告

平壤側にとっても確実に「いい体験」



「若者」などというくり方に意味があるのかはわからない。しかし、世界のどこにおいても、これからの自分の人生を、身近な人との生活を、生まれた国のあり様を、どのようにしていくのか決める権利が「彼ら」にもあることは確かだ。



[ 報告 ] JVC2020年カレンダーのお知らせ

品質に自信あり！  
プライドをかけて創るカレンダー

[ 報告 ] 気仙沼初訪問報告

8年の歳月。  
今の気仙沼を訪問して感じたこと





朝鮮の学生と最後の別れの場で、お揃いのポロシャツを着てスマホで自撮り。交流中は双方の学生ともスマホを出し合い自撮りをする場面が多くあった

まず私は、現地の大  
学生に初めて会って、  
開口一番に「日本政府

に謝罪と賠償を求める  
ために日本語を学んで

います」と言われたの  
だ。正直戦争を直接経

験していない世代とし  
て、謝罪や賠償という

言葉は馴染みがない。韓国とよく慰  
安婦問題でもめている印象はあった  
が、そこまでの知識でどこか他人事

として捉えていた。その中でいきな  
り直面した自国の過去の過ちに向き  
合わざるを得なくなったのだ。

これを契機に外から自国を見つめ  
直す視点を得た私は、もっと日本人  
として日本のことを知らなければと  
思うようになり、大学院に進学し、  
日本社会に存在する今まで自分が見  
てこなかった文化や価値観を理解で  
きるよう勉学に励んでいる。

今年が学生代表として2018年  
の自分にはできなかった、さらに発  
展した交流を企画し5月と8月の2  
回朝鮮を訪れた。その中で学生や現  
地の受け入れ機関の方々と信頼関係

を構築する一役を担い交流を企画し  
実現することができた。

### 有権者としての役割を 果たしていなかった私

この事業に携わり、私の価値観は  
大きく変化した。朝鮮半島という自  
国の外に視点を向けることによっ  
て、自国の社会を再考察することが  
できた。

まず最近強く思うことは、同世代  
の投票率だ。若者の投票率は年々下  
降を辿り、20〜30代はもともとだが、  
2016年から選挙権を得た10代に  
関してはもはや壊滅的である。

普段同世代と接していても、政治  
を語ることはタブー化され、少しで  
もその類の話振ると「意識高い」  
の一言で片付けられる。かく言う私  
も、この事業に参加するまでまった  
くと言っていいほど政治に関心はな  
く、投票にも行っていなかった。

しかし初めて体制が違う隣国を訪  
れ「果たしてそれで良いのか」とい  
う疑問が生まれた。初めて朝鮮を訪  
れた際「朝鮮における民主主義とは  
どのようなものですか?」と聞いた。

「我が国では主体思想の元、自主性  
を大切にすることが求められる。だ  
から人民は自らの意思で必ず全員選  
挙に行くのです」そう答えて「日本  
における民主主義とは何ですか」と  
問われた。私は明確な答えを返せな  
かった。自分自身も民主主義国家に  
暮らす一有権者として、その役目を  
果たしていなかったからである。

民主主義国家での意思表示は権利  
であり義務でもある。それを私たち  
若者一人一人も持っていると思っ  
ることが今一度必要ではないだろう  
か。そう強く思った。

### 隣国と対立しての 未来とは…

現在は日頃から意識的に周りと政  
治の話をするようにし、自らの政治  
的価値観を発信するように心掛けて  
いる。もちろんこのような話題にな  
ると一歩引かれることもあるが、政  
治を知っている人も知らない人も巻  
き込んで日頃から議論を展開するこ  
とが重要であると心掛けている。

若者は、このまま政治に関心を持  
たずに社会を担っていいものか。

だろうか。世代が変わっていても  
いいのだろうか。不安が残る。今一  
度、自分がこれから築く社会、その  
中に生まれて来る未来の子どものこ  
とを考えて行動していくことが必要  
ではないだろうか。

特に現在の日本と朝鮮半島の関係  
性は凍りついていると言っても過言  
ではない。お隣の国との間に対立を  
生んでの未来はあるのだろうか。私  
たちの次の世代は国籍も民族も異な  
る人々と関係を築き、生活してい  
かもしれない。そうなったときに国  
と国という主語で関係性を判断して  
いては、何も発展性はない。そここ  
ろは人と人という個人間による情が生  
まれ、その中で関係性が築き上げら  
れていく。その第一歩として、まず

は隣国である朝鮮半島から、関係性  
を築いていく動きが必要なのではな  
いかと考える。その意味でも文化交  
流は断つべきではなく、むしろつな  
がりを保つ上で最も大事な交流関係  
であるという認識を持たなければな  
らない。その重要性をこれからも自  
らのコリア事業における交流事業を  
通じて強く訴えていきたい。



今年初めて交流した金日成総合大学の学生との交流の姿。朝鮮の学生が言っていた「初めて話す日本人」という言葉からも「近くて遠い国」と感じることもあったが、若い世代から少しずつでも交流を重ねていきたい



宮内大河（24歳）  
日朝大学生交流2018／  
2019の学生リーダー！  
日本大学4年。現在、在日  
コリアンの友人がいることから朝鮮大学校  
をはじめ同世代の若者が抱える課題を把握  
し、日本と朝鮮、在日コリアンの境遇を改善  
できるように活動中。

## 私たちは 真剣に考えてこなかった

私は、日本と朝鮮の間をつなぐ活動をする中「違和感」を覚えている。その違和感は、日本と朝鮮の間の「過去」に起こった歴史的な問題や「今」日本で起こっている在日コリアンに対してのヘイトスピーチや朝鮮学校

の無償化対象外の問題など両国の間に横たわっている一連の問題について、日本人である私たちがいかに真剣に問題を考えてこなかったことに起因すると私は考える。

日本から見た「北朝鮮」という国は、拉致・核・ミサイルのように政治的な問題で語られることが多い。

## 双方の国の考え方は違う。 それを認識した

18年、19年と2年連続で朝鮮へ訪問し、朝鮮の大学生との交流や朝鮮の教育機関や市民の生活などを自分の目で見てきた。

そんな国家間の政治的問題の固定観念——「北朝鮮は危険な国」——を持って、18年、初めて朝鮮を訪問した時は、朝鮮の一般市民が普通に暮らしていることを見ただけでも驚く事が多かった。大学生交流で朝鮮の学生と話して感じたことは、日本を外から見た時に、日本の中で通用している「考え方」と朝鮮にある「考え方」は違い、その違いをまず認識する事が重要だということだ。

交流で平壤外国語大学の学生と話す中で、両国の中に深い溝の原因としてあるのは、日本が過去に行った朝鮮半島の植民地支配に対して謝罪や賠償がないことだと朝鮮の大学生が言っていた。

「日本は、戦前にアジアを侵略し朝鮮半島を植民地にしてきた」という私が学校で学んだ歴史は、「日本から見た歴史」で「朝鮮から見た歴史」ではない。日本人が教科書の数ページあるいは数行で学ぶことは朝鮮からみれば自分の家族や仲間が苦しんだ歴史でもある。日本の隣国であるのに、時には政治的な問題によって国家間の情勢が大きく左右される。「朝鮮・韓国と日本の関係がこのようにして、冷えた関係になるのはどうしてか？」

この問いを日本人は考える事が少ないのではないだろうか。私が日本で生まれてから今までずっと「北朝鮮は危険な国」と日本のメディアや学校で教えられてきた。本当にそうなのだろうか。そのようなことを少しでも解決するために、まず根本的なこと、つまり「相手の言葉に冷静に耳を傾け、相手を知って理解する事」が重要でないかと私は考える。

## 朝鮮や韓国を理解できる 相手は身近にいる

日本には歴史的な経緯から、在

日コリアンの人々が多く住んでいる。私にも朝鮮大学校をはじめ多くの在日コリアンの友人や知り合いがいる。そんな彼らは、日本と朝鮮の「国」と「国」の情勢によって、日本で生まれたにも関わらず、攻撃の対象になってしまっている。

どうして同じように日本で住んで暮らしている人間に対してヘイトスピーチなど、残酷な事が起こり合えるのかと考えた時に、やはりそこには相手の言葉を聞き、理解しようとする事が不足しているからではないかと考える。日本と朝鮮の「国」と「国」との関係改善することは、大切な事だ。だからと言ってすぐに、「国」と「国」との関係性を交えることは難しい。私たちにできることは、まず相手を想像し、憎しみではなく、友好の土台を築くことではないだろうか。日本にいる朝鮮学校の子供たちや日本にあるコリアンタウンといった身近なところから相手を理解する事が今後のためにも有効で確実な「一歩」になると私は思う。

## 南アフリカからのリアルボイス

南アフリカでは若者への公的サポートはないに等しく、将来に希望をもてない若者は働きもせずに酒に浸る。そんな一人だった少女は、JVCの事業に出会い、貧困のなかにも自らの可能性に目覚め、今、医者を目指して勉学に励む毎日だ。



ムボムラウジ（18歳）  
ボドウェ村トシバデ地区  
在住。ヌワレデイ高校2年  
生。JVCが2012、

2017年度まで活動していたボドウェ村の子どもケアセンターに通っていた。

### 腐敗する政府と 希望を失っていた私

私は兄と双子の妹と暮らしています。母は農場で働き、週末しか家に帰ってきません。父はいません。

南アフリカの社会は危険だらけです。一方、政府には腐敗が充満しているため、私たち若者が人生で直面する課題を克服するのに十分な社会的サポートはありません。その結果、希望を失い、酒を大量に飲み、何もしないで街中をただ歩き回る若

者をたくさん見かけます。

多くの若者は働いておらず、自分の親や祖父母あるいは他の家族などに政府から支給される社会保障（年金のようなもの）に頼っています。これは家族全体を養うには十分ではありません。

都市でも農村でも、コミュニティのなかには年齢制限がない小さい酒場がたくさんあり、私の村でも、こうした酒場で酔った若者の間でケンカになり、互いに刺し合う事件が何回も起きています。さらには、警察がこの若者たちと一緒に酒を飲むので、何の役にも立ちません。

かくいう私も、心の内にいつも怒りを抱え、他の子たちとケンカしてばかりでした。

なぜなら、私は、自分の家庭環境

と他の子たちを比べ、羨ましくなり、自分を嘆いていたからです。だから、「ケンカ」に勝つことでようやく自分の誇りを保っていたのです。また、夜になると男の子たちと出歩き、酒場で酒も飲んでいました。母が私に話しかけ、諭そうとしても、いつも無視してその場から立ち去っていました。

### 貧困でも自分の可能性を 諦めないとした決めた

でも、ボドウェ・子どもケアセンター（注1）に通ってからは変わりました。自分と同じような境遇の子たちと交流し、チームとして活動し、支え合う経験により、まず自分を受け入れられるようになりました。このことを通じ、私自身を変え、生き方も変えたのです。

こうした社会状況下で、若者が直面する様々なプレッシャーや課題の克服には、子どもケアセンターやJVCのようなNGOが、地域の中にあることが必要です。他には、娯楽施設や図書館も必要と思います。

そして、困難を乗り越え成功した

人が、たまに村に戻り、その経験を地域の若者たちと共有し、人生には努力が必要で、簡単に解決されるものなど何もないことを伝えることも必要です。そして親は、貧困だからといって子どもの可能性を諦めるのではなく、子どもの才能を見極め、伸ばす努力をすべきだと思います。

これまでJVCは、地域の若者たちの手本となり、私たちに学校に行くよう励まし続け、諦めることなく、私たちの可能性と才能を引き出してくれました。また、子どもケアセンターでは、私たち若い世代が集い、お互いが支え合う場と機会を提供し、私たちが自分の可能性を見いだせるようリードしてくれる、素晴らしい仕事をしています。

生き方を変えた私は、学校に通い、真剣に勉強するようになりました。実は、かつて2年留年しているんです。でも、二度と同じ失敗は繰り返しません。勉強して、いつか医者になりたいと決心したからです。それはかなうと信じています。

◎注1…JVCの2017年度までの現地パートナーで、親がいないなど困難な家庭環境下にある5～20代前半の子どもたちが通う場

## パレスチナからのリアルボイス

圧倒的な窮状に生きるパレスチナ人。その不遇にまったく無知なユダヤ人。パレスチナ人の著者は、パレスチナ社会にもユダヤ社会にも生きづらさを覚えるが、右傾化を「正しい」とする風潮には世代間のコミュニケーションが必要だと訴える。



アフマド・シヘル(29歳)  
パレスチナ人の両親の元に  
クウェートで生まれる。湾  
岸戦争勃発時にパレスチナ

に戻り、東エルサレムで育つ。大学で1年間米国学。現在は西エルサレムの病院で看護師として働きながら、ヘブライ大学で日本語と日本文化を学ぶ。

ユダヤ人との  
圧倒的な差

東エルサレムの社会は、パレスチナ人が負のスパイラルから抜け出せない構造になっています。ゼロから成功するのは極めて難しい。最近では難民キャンプを出る人よりも、より安い生活を求めてキャンプに移り住む人が増えています。

パレスチナ人居住区は新しい家やビルを建てる許可が出ないため、開

発が進むユダヤ人地区との格差は拡大しています。圧倒的な差を前に、

多くのパレスチナ人青年が「お金を稼いで家を出たい」と考え、高校を中退します。西エルサレムで清掃人・配管工、飲食店のキッチンスタッフなどとして最低賃金で働き、東エルサレムより給料が高かったとしても、社会保障はなく、生活に余裕はできません。

私はほとんどのパレスチナ人より恵まれた環境にいます。9人のきょうだいを支えるべく18歳からクウェートで出稼ぎしていた父は、湾岸戦争ですべてを失いました。単純労働の厳しさを痛感した両親は、私の教育を最優先にして、エルサレムの私立校に通わせてくれました。家計を切り詰め学費を工面したので、

12歳のときまで家にテレビもありませんでした。おかげで私は大学を卒業でき、看護師になりました。言語も得意だったので、ヘブライ語を学び、今は西エルサレムの病院で働いています。

右傾化を「正しい」と  
思う人たちとの  
コミュニケーション

数年前に仕事と生活の拠点を西エルサレムに移したのは、パレスチナ社会での生きづらさのためです。

大学卒業後、東エルサレムのキリスト教系の病院で働きましたが、私がゲイであることで、アラブ人の同僚からいじめを受けました。その性的指向を打ち明けてから家族との関係も悪くなり、家を出ました。

西エルサレムも決して居心地がよいわけではありません。職場や大学のイスラエル人は、私を「アラブ系のイスラエル人だと思っています。パレスチナ人は「ユダヤ人を殺そうとする野蛮な人々」だと刷り込まれているので、私のようになりべらる人間がパレスチナ人であるはずがない、と考えるのです。彼らは兵役に

ついていた人がほとんどですが、パレスチナ人が受けている不当な扱いについては無知で、私を通してパレスチナの文化や状況を知ろうとしてくれる友人もいます。

イスラエル社会は長らく右傾化が続いていますが、米トランプ政権の誕生に象徴される世界的な排外主義や優越主義の高まりを受けて、「自分たちは正しい」という自信を深めています。

世界各地で右傾化が進む背景には、変化や他者に対する人々の恐れがあると思います。しかし政治も経済も、従来のシステムは行き詰っている。世代間のコミュニケーションが必要です。上の世代は若者のニーズに耳を傾け、下の世代は上の世代の経験を尊重し、彼らの恐怖を理解しなければいけない。妥協ではなく、皆の利益のためです。

ただ、パレスチナ・イスラエルについては、世代間の分断が問題ではありません。イスラエルの戦争産業を完全に解体しない限りは、どんな取り組みも傷に化粧をするだけで、治すことにはならないと思います。



## 若者は変化のために行動を起こす

——特集記事のまとめにかえて——

広報／フアンドレイジンググループマネージャー 並木 麻衣

今回の特集記事では、南アフリカ、パレスチナ、そして日本の若者が置かれているさまざまな立場からのリアルボイスを紹介した。そこに共通するのは、異質なものを排除し、既得権益を守ろうとする社会のなかで、今自分が声を出さねば、行動しなければ、自分も社会も変わることがないとの訴えだった。特集記事をここに総括したい。

この原稿を執筆中の2019年10月1日、「香港で抗議デモ参加者が初めて実弾で撃たれた」とのニュースが飛び込んで来ました。18歳の男子高校生の胸に実弾が撃ち込まれた事件が、中国政府や香港当局への更なる反発を呼び、今後とも大規模デモが続くと見込まれています。

デモの映像には鳥肌が立つような既視感を覚えます。私がパレスチナで幾度と見た若者によるデモのように、両脇を抱えられ引きずられて行く姿、白く立ち上る催涙ガス、道路脇で始まる怪我人の手当てといった光景が繰り返し広げられていたからで

す。

そして改めて浮かんだ問い——「なぜ、若者は世界のそこかしこでこんなにも憤っているのだろう。パレスチナ人ならこう答えます——「二度きりの人生を、人間らしく生きさせてほしいんだ」

社会構造のもたらす暴力に翻弄され、自己決定権を奪われてもなお生き続けるしかない人びとの、心の底から絞り出すような願いです。パレスチナでは、若者はイスラエル兵に投石して抗議していました。一方では、無茶な車の運転で騒音を立て、煙草や薬物に走り、夜の街で誰かに

絡む若者も多く、そうやってエネルギーを発散する姿は世界中で共通しているのかもしれない。

南アフリカのムボさんの記事を読んで、大人たちが構成する社会がいかに若者たちにフラストレーションを抱え込ませているのか、そして一歩間違えば彼らが命を落とすという、事の大きさを思いました。同時に、「どうして彼／彼女たちを頑張らせなければならぬのだろう」という疑問も浮かんできます。

パレスチナのアフマドさんの記事では、難しい出自のなかで人生を切り拓いてきた彼が、本来は若者を見守るべき大人をも飲み込む政治経済の波、正当性にすぎりつき自分を優先しなければならぬ辛い世界、誰かの犠牲を前提にする軍需産業の暴力が、人々の分断に拍車をかけていることを冷静沈着に分析しています。

そんな中で、国連でスピーチを行った16歳の環境活動家グレタ・トゥーンベリさんが話題です。

一人でデモを始め、たった一年後に国連気候行動サミットに登壇、「How dare you (よくもそんなこと

ができる)」という強い言葉を交え、温暖化防止へと動き出さない各国のリーダーに訴えた堂々たる言動に、世界中で様々な憶測や批評が飛び交っています。

そこからは、大人が自分の優位性に拘泥している様子、自分たちが享受するものを失いたくないという視点の短絡さが見て取れます。結局はこの姿勢こそが、コミュニティで、世界全体で、若者へ暴力をふるう構造を支持し続け、若者に無力感を広げているように思うのですが…。

日本と朝鮮半島を行き来している仙道さんと宮内さんの記事からは、人と人との触れ合い、ぶつかり合いをきっかけに、隣国との関係性の希薄さ、メディアや政治が塗り重ねて来た過剰な負のイメージを自分事として捉え、変化のために行動を起こしている次世代の頼もしさを感じました。

異質なものの、違う世代…。草の根組織のJVCらしく、私たちも一つ一つと真剣に向き合っていけたら、と勇気をもらえる特集記事となったように思います。



事務所の外観

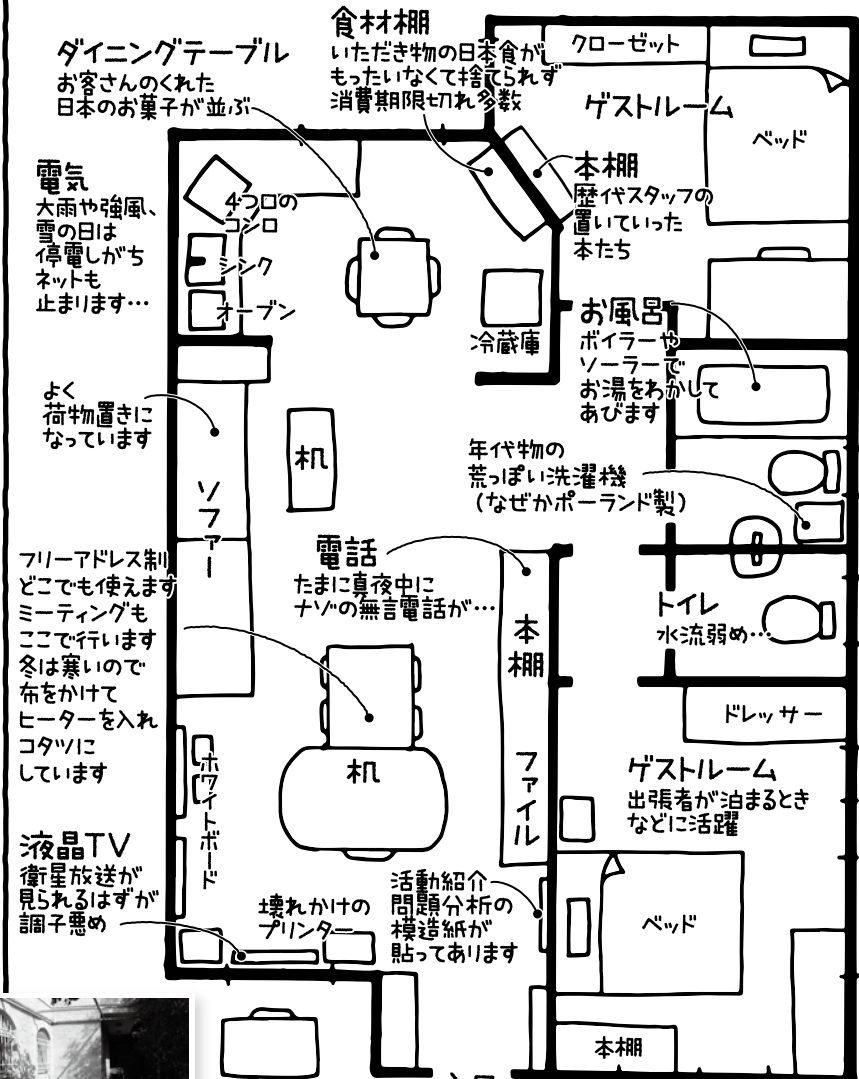
# 現地事務所へ

間取りから見るワーク&ライフ

# ようこそ!!

vol.02  
パレス千十編

## JVCエルサレム事務所見取り図



今号はスタッフ山村・大澤・渡辺が駐在するエルサレム事務所の様子をお届けします!!

### Q1 始業・終業時間は?

8時～16時。時間を過ぎてもオフィスにいることが多いです...

### Q2 ランチに何を食べていますか?

- 基本的に日本食よりのものを台所で適当に作っています。アラブ料理は少なめです!よく皆で食べています。(山村)
- 近くのシャワルマ屋さんで買って食べることも。(大澤、渡辺)



シャワルマ...あぶった削ぎ切り肉です

### Q3 アフター5の過ごし方は?

- アラビア語のレッスン
- ヨガ教室(山村)
- ギターの練習(大澤)
- 現地の友達の家をふらっと訪れて晩ご飯をいただく(全員)

### Q4 事務所のいいところ、大変なところは?

[いいところ] ●なんとと言っても大家の人柄が良い。いつも気にかけてくれる。●夏は涼しいし冬は暖かい。●とても安全。●庭があり、四季折々の果物の恵みを受けられる。●庭に猫が多く来るので、飼っている気分になる。(隣人不在中は、隣人の猫のご飯のお世話もします)

[大変なところ] ●少し小さめなので、独立した応接部屋がないところ。●なにか故障しても修理屋が何ヶ月もこない。(エルサレムのパレス千十側では修理屋事情が非常に悪いです。優秀な修理屋はみんな報酬の良いイスラエル側に行ってしまうそう。) ●ユダヤ教のお祭になると、夜まで大音量で音楽が聴こえ、うるさくて眠れないことも。●冷凍庫の氷が停電や老朽化に伴って溶け出し、床が水浸しに。●繁殖期の猫の声が夜や早朝でもうるさい。



団らん用の  
外テーブル  
大家と朝ごはんを  
食べることも



果物のなる庭  
オリーブやザクロや  
レモンが茂っています  
野良猫も  
日なたぼっこに来ます

次回もお楽しみに!







交流最終日を終えて、お互いに寄せ書きを贈りあった日朝の学生たち

[報告] 朝鮮民主主義人民共和国出張報告

## 平壤側にとっても 確実に「いい体験」

8月。朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)で、今年で18回目となる子どもたちとの絵画交流と7回目となる日朝大学生交流が行われた。国家レベルではなく、この民間交流においては、今年も日朝双方で信頼の蓄積を確認できたと思う。今後は、この事業に参加した学生が、自らの体験を語ることで、普通の北朝鮮のことや東アジアの平和に関心を持つ学生を増やしていくことが試される。



コリア事業担当  
宮西 有紀

ルンラ小では、児童たちが、私たちと同時に訪朝した朝鮮学校の生徒とともに、19年度の共同制作『へいわのおまつり はじまるよ』を実施。子どもたちは5つのグループに分かれ、赤・青・黄・緑・白のイメージカラーに合わせ「へいわのおまつり」のパフォーマンス場面と、それに参加する自分を含めた作品を仕上げた。

朝鮮学校の生徒とルンラ小23名の児童が行なった絵画交流には、『ともだち展』訪朝団も同席し、児童に『ともだち展』の趣旨を紹介したところ、みな集中して聞いていた。昨年ルンラ小から出品された作品2点を描いた当人に日本からの手紙を手渡すと、照れながら受け取ってくれた。

展示会場にはほかの在校生も参観し、ゴジラや天狗など見慣れない展示作品に興味を示し、日本の大人や朝鮮学校生をつかまえては積極的に質問し、日本を紹介する貴重な場になった。

続く茶話会では、訪朝団の大学生も自己紹介し「カリラ(白頭山へ行

### ゴジラや天狗に 質問責め

8月19日から27日、『南北 코리아 と日本のともだち展』(注1)。以下、『ともだち展』実行委員会の訪朝団として、朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮)を訪問し、子どもの絵画交流と日朝大学生交流を実施し

た。訪朝団は大学生9名(昨年より3名増)と研究者やジャーナリストを含む総勢18名。

絵画交流のため、今年も平壤市内の2つの小学校(ルンラ小、チャンギョン小)を訪問。昨年の絵画交流に参加した子どもたちには、参加賞と日本からのメッセージを手渡した。

◎注1…南北 코리아 と日本のともだち展。2001年より実行委員会形式で開催する、日本と朝鮮、韓国の子どもの絵画展。実行委員会は、KOREA子どもキャンペーンのほか、在日本韓国YMCA、地球の木など9団体で構成。絵とメッセージの交換を通しての「出会い」が目的で、(左ページにつづく)



日本の朝鮮学校の子どもと平壤のルンラ小学校の生徒の共同作品「へいわのおまつり はじまるよ」でそれぞれの作品を手にする子どもたち



ルンラ小の茶話会では、大学生が身振り手振りで児童とも交流した

こうし」といって朝鮮の歌を披露した。子どもたちの輪に入り、朝鮮語のできる学生は直接コミュニケーションをとったり、子どもたちに手をとりながら会場を案内されたりと、のびのびとした雰囲気があった。

### 「私が今日からできること」は「民間交流の継続」

日朝大学生交流は3日間実施し、平壤外国語大学生14名(1日目10名、2・3日目7名)、日本の学生9名(3日目は10名)が参加。外大の参加者は全員が、日本側の学生も9名中7名が初参加だった。

初日は、日本の学生の自己紹介のあと、すぐにペアに分かれての交流がスタートした。日朝の学生ともに最初は緊張が隠せない様子だった

が、徐々に打ち解けると笑顔も見られるようになった。初対面は約45分という短い時間ではあったが、2・3日目に参加できない外大の女子学生が、「私のことを覚えていてほしい」と日本の女子学生にパンダのクリップを贈る、という出来事もあった。

翌日は、午前中、の市内見学のあと、午後は日朝混合チームによるバレーボールを試合形式で行った。大人は応援合戦に参加し、また、ときには試合にも出場し、全員が交流を盛り上げたと思う。バレーボールのほか、テニスやバドミントンでも汗を流したが、このスポーツ交流で、一気に日朝の学生の距離が縮まったようだ。

交流最終日は、朝から夕方までの終日を龍岳山(リョンアクサン)での座談会に充てた。

車座になって一緒に弁当を食べたあと、3つのグループに分かれ、「将来の夢」「夢を実現させる世界とは」「私が今日からできること」という3つのテーマで未来について話し合った。

各グループには、訪朝団メンバーと平壤外大教員からひとりずつファシリテーターに入ってもらった。将来の夢は様々な意見が出たが、「夢を実現させる世界」には、「民間交流」「多様性」「違いを理解できる世界」といった共通点が見られ、「私が見たい世界」「民間交流の継続」というキーワードが多く出た。

### 平壤側にとっても確実に「いい体験」

最後に、訪朝団メンバーであり「ヘイトスピーチを許さないかわさき市民ネットワーク」事務局の山田貴夫氏が「日朝関係も南北関係も日韓関係も不十分ななか、将来的に日朝韓交流を『大学生交流』の夢としてもってほしい。そのためには日朝交流のパイプを太くしておくべき。キーワードは『継続』、自分の体験を通して広めてほしい」と講評したあと、

外大の講座長先生が「私たちは、1日目で『顔見知り』になった。2日目で『知り合い』になった。そして3日目で『ともだち』になった」と

この3日間の交流を振り返り、座談会を締めくくった。

今回、1日目で2・3日目の外大側メンバーが異なり、3日間を通して参加した外大生は3名だけ。日本側の学生からは、「3日間同じペアではなかったのですが、いろんな学生と話せたが、同じ人ともっと深い話もしたかった」という声もあったが、そこには、外大側の「より多くの学生に日本人学生との交流を体験させたい」との意向の反映があったのだ。今年で7回目を迎えた日朝大学生交流は、平壤側にとっても確実に「いい体験」として受け止められているといえるのではないかと。

平壤側の期待に応えるためにも、帰国後、各学生が「自分の言葉」で体験を語る機会をつくり、日本と朝鮮半島、そして東アジアの平和に関心を持つ学生を増やしていくこと、この活動を継続していくことが私たちの責務である。これから報告会(12月を予定)や東京展(2月末)で直接学生の声を聞いていただければ、場をもつ予定なので、ぜひご参加いただきたい。

(右ページからつづき)日朝・日韓間の直接訪問をした子どもも延べ273名を数える。朝鮮側では「朝鮮対外文化連絡協会」が平壤市内の小学生の絵を提供する。平壤のルンラ小学校で02年より絵画展を開催してきたが、日朝関係の悪化により07年からは交流会のみを行ない、14年に一時的に再開した。



印刷の立合いの様子。写真家、デザイナー、印刷会社の担当者がテストで刷られた用紙を確認する。ほんのわずかな色の違いを修正していくが素人目には違いがわからない

[報告] JVC2020年カレンダーのお知らせ ■■■■■■■■■■

# 品質に自信あり! プライドをかけて創る カレンダー

JVC国際協力カレンダーは1986年の「アフリカ救済キャンペーン」でユニセフ、UNHCRと共同で制作したことをきっかけに始まりました。それから30年以上続き、累計で50万部を超えるロングセラー商品となっています。カレンダーがどうやって作られているのか、そこにはどんな思いが込められているのかを紹介します。



JVC収益事業担当  
伊藤 圭

新しいものを取り入れながらも自分たちの文化や伝統を大切に生きる。必要なものは取り入れ unnecessaryものは受け入れない。自分たちの生き方は自分たちで決め、ローカルとグローバルがバランスよく共存するその社会は、JVCが目指す社会のあり方にも通じると考えます。

梅雨の季節には  
太陽がほしい!

写真家が決まると写真の選定に入ります。写真家、デザイナー、印刷会社の担当者が集まり、一日かけて写真を選びます。今回、竹沢さんは全部で80枚の写真を用意してくれました。

クック諸島と言えばリゾート感溢れる美しい海で知られていますが、それだけで構成してはただのキレイなカレンダーになってしまい、JVCが作る必要はありません。クック諸島の自然や文化を余すところなく伝えたい、しかしカレンダーなので説明的な写真だと一ヶ月見続けるのは辛い。人や風景のバランスも考え12月までの写真を選びました。

## 2020年の テーマは「幸せ」

年末。嵐のような繁忙期がカレンダー担当を襲います。なんとかそれを乗り越えお正月を迎えても、翌年の写真家を誰にするかで頭の中はいっぱいです(笑)。そんなわけでカレンダーの制作はお正月から始まりま

す。

2020年のテーマは「幸せ」。写真家は竹沢うるまさんで、クック諸島の写真だけで構成しています。

クック諸島の人々は世界で最も幸せに暮らしている、と世界150カ国を巡った竹沢さんは仰います。差別意識をもたず、自然に敬意を抱き、

写真の選定の様子。この日は写真家、デザイナー、印刷会社の担当者、JVC広報グループマネージャー、カレンダー担当者が集まり約80枚の中から使用する13枚を選んだ



での洗濯物の写真を6月に合わせ「太陽が欲しい！」を訴えています。写真の選定に加え、写真の流れといるものがあります。1月から見てストーリーを感じられるよう写真を組んでいくのです。それが竹沢さんがカレンダーに込めた思いです。

## タイトルデザイナーは 力の見せどころ

写真の選定と同時並行で行うのが暦の制作です。今年の大きな問題は5週表記にするか6週表記にするかでした。18年までは6週表記でしたが、暦の数字が見えにくいという声

例えば、学校の先生が退任する写真は卒業式に合わせて3月に、5月の写真は子どもの日に合わせ、8月は海の写真がいいねと、それぞれの季節に合わせて選びます。ちなみに本誌に同封されているカレンダーのチラシには、梅雨の季節

を受け、19年は5週表記で数字を大きめにしました。アンケートでは見えやすくなったという一方で、表記は6週の方が便利という声が多く寄せられました。そこで20年は6週表記で数字を大きめにすることにより

使えやすさを追求しました。また、これまで好評をいただいていた月齢の他に、希望の声が多かった6曜や24節気、雑節を加え、ますます便利になりました。カレンダーの使いやすさを追求する上で重要な役割を担うデザイナーは、元博報堂アートディレクターの宮坂敦さんに依頼しています。特に注目していただきたいのがタイトル

のデザインのデザインです。13枚の写真で組んだ竹沢さんの世界観を表すようにかなりの時間をかけて制作してくれました。タイトルを見ればどんな世界観が広がっているのか分かる

と。といっても過言ではありません。また暦に使われているフォントも世界観に合うものを選び、見えやす

に加えカレンダーの機能性を考えデザインされています。もし快適にカレンダーを使っていたら、それは良

いデザインということ。これもまたJVCカレンダーの魅力の一つです。

## 印刷物は生き物。 色合せは トライアル&エラー

印刷会社はどこでもよいわけではなく、写真家の高い要求をクリアできなければなりません。カレンダーの印刷は高精細印刷を得意とし、数多くの写真集を手掛ける文化堂印刷株式会社に依頼しています。

そんなプロ御用達とも言える会社でも印刷は一筋縄ではいきません。そもそも印刷で表現できる色には限界があり、また同じインクと紙を使用しても印刷する日の気温や湿度で色が変わるため、写真家の思う通りの色に近づけるために何度もトライアル&エラーを繰り返します。

色校(本番の印刷前に行う色合せ)は3回行い、さらに本番では竹沢さんと宮坂さんも印刷に立ち合いのもとで色を追い込んでいきます。指示された通りの色を作り出すにはプリンティングディレクターの技量が問われます。この写真はこの色で良い



2020年の表紙はポリネシアンダンスー。タイトルは「トゥム・テ・パロパロ〜幸せの音が響く島〜」。「トゥム・テ・パロパロ」とはクック諸島の中心、ラロトンガ島の古い呼び名で「音が生まれる場所」という意味

と決まると、同じ設定でも翌日に印刷すると色が変わってしまったため、即印刷します。

素人目にはどう見ても同じ色に見えないレベルの微妙な違いですが、関係者は皆プロですから安易な妥協はしません。色が決まるまで3〜4時間かかり、そこから本番の印刷にさらに数時間かかります。実際には午前9時過ぎに印刷工場に入り、深夜0時頃まで続けても終わらず、さらにもう1日かけて印刷を行いました。あとは製本して納品です。

このようにJVCカレンダーは写真家、デザイナー、印刷会社がそれぞれを誇りにかけて「仕事」をして作られています。だから品質には絶対の自信があります！



気仙沼大島大橋(愛称は鶴亀大橋)から気仙沼湾を展望した風景

[報告] 気仙沼初訪問報告

# 8年の歳月。 今の気仙沼を訪問して 感じたこと

私たち2019年度インターンの2名は、前気仙沼事業担当(現会員・支援者担当)の横山さん、収益事業担当の伊藤圭さんのはからいで、8月下旬に宮城県気仙沼市を1泊2日で訪問した。これまで震災被災地を訪れてこなかった人間として、今の気仙沼がどう目に写ったかをお伝えしたい。



左：  
2019年度 広報インターン  
三浦 俊太郎

右：  
2019年度 ホームページ分析インターン  
長谷 崇弘

JVCは津波被災者の方々が高台への防災集団移転を行う際、アドバタイザーの派遣を行った。今回は幸運なことに、その際にお世話になった方の一人で、大浦地区防災集団移転協議会元会長の熊谷和裕さんの自宅にお伺いする機会に恵まれた。熊谷さんの第一印象は親切で気持ちの良い人だなというもので、率直な口ぶりです。今の気仙沼についてお話ししてくれました。

## 「震災前の町に 戻ることはない」

最初に津波が押し寄せた時は、熊谷さんは世界が終わるとさえ思ったそう。しかし、危機を前に住民は団結した。JVCの協力もあり、長い年月の末に浦島地区のうち3集落で集団移転が無事行われた。しかし、復興は進んだ一方で多くの課題が今も残っている。多くの人が震災後に気仙沼を離れてしまった。熊谷さんのお話から、今後の気仙沼は人口減少と高齢化という、長期的かつ解決の難しい問題と向き合っていかなければならないことが伝わってきた。

## きれいに 整備された町で

震災から8年以上経った今、なぜ気仙沼に行くのか。本音は「被災地を一度は自分の目で見ておきたい」という単純な気持ちだったものの、心配もあった。実際、最初に車で気仙沼を案内してもらった時に感じた

印象は、所々に震災の痕は残っているものの立派に復興しており、あまり震災は強く想起されないというものだった。この綺麗になりつつある街から自分は何か学び取れるものがあるのだろうかという不安が頭を過ぎった。

しかし、そんな浅い考えはすぐに消え去った。



2日目朝の気仙沼魚市場の様子。  
カツオ、マグロ、メカジキなどが揚がっていた。  
活気のある様子が伺える

た。

2日間にわたる見学の最後に訪れたのはリアスアーク美術館と気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館。津波が持つ暴力や残酷さを無言で伝えてくる展示や遺構を見ると、この場所だけが時間が2011年で止まっているような錯覚に陥ってしまふ。写真の中の光景とこの2日間見てきた気仙沼が同じ町だとは信じられなかった。

なぜ人々はこれほどひどいことが起きてても挫けなかったのだろうか。震災と向き合った際に気仙沼の人々が見せた団結力や力強さを改めて感じ、人が持つ底力に希望を持った。

しかし、熊谷さんがおっしゃっていたように、「気仙沼が震災前の町に戻ることはない」という現実も同時に感じ、寂しくなった。(以上三浦)

### かつて テレビで見た街へ

2011年3月11日、自分は高校を卒業して大学に入るまでの春休み期間中を過ごしていた。地元の手葉でもかつて体験したことのない揺れを経験し、自室の本棚や机も倒れた。テレビでは大津波が街を飲み込み、丘陵が火に覆われている姿を流していたのを覚えている。大学を卒業して以降も、自分が被災地と関わりを特に持とうとしてこなかったことに、宿題が残っているかのような感覚をどこかで持っていた。

今回の気仙沼訪問は、自分の中にある課題が解きほぐれる機会になると思い、気仙沼事業を担当していた横山さんに市内を案内してもらった。8年前テレビで見た津波に飲み込まれた町、特にJVCが活動で深く関わった鹿折地区市街地は、盛土で整備され少し不自然さを感じるほど平らな土地が印象的だった。整備された区画された土地には空き地が目立ち、震災前の住人が戻ってきた場合や、新たに気仙沼に住もうとする

人のための土台はつくられているが、実際に使われるかはわからない、という。地方都市の人口減少や少子高齢化などの問題は昨今よく言われるが、それらはこの街にも当てはまる問題であると肌身に感じた。

### 海が見えない海岸線

2日目は三陸海岸沿いの国道を通って仙台まで戻った。気仙沼市内でも防潮堤が建設されていたが、三陸海岸沿いも土木工事が広い範囲で行われており、大きなクレーンが立ち並んでいた。そう遠くない未来に、岩手から福島の海岸沿いが防潮堤で囲われる日が来ると感じた。東日本大震災の映像は多種多様なメディアで保存されているので、100年経っても震災時の状況はある程度わかる。それでも、津波や地震の映像を見るだけでなく、3・11の爪痕を身体ごと感じたいのなら、やはり現地に行くしかないのだとわかった。すべて解決したわけではないが、課されていた宿題にひとつの答えが出たように思う。



気仙沼湾を横断する三陸沿岸道路の橋脚工事。間近で見るとかなり存在感のある大きさだった

最後に、「復興」の意味について考えたい。「復元」とは違い、必ずしも元に戻すことを指す言葉ではない。再び気仙沼が街として栄えようとする中で、防潮堤を海岸線に建設することがどれだけ影響を及ぼすのだろうか。気仙沼が漁業だけでなく観光産業にも力を入れていくならば、ゆるキャラ「ホヤばーや」や漁港に代表されるような、海と密接に結びついた街である気仙沼の魅力が、安全の名の下に低下する恐れがある。もちろん、安全を度外視するわけではないけれど、1日目に鶴亀大橋から見たあの風景を残したまま安全に暮らせる方策がなかったのだろうかと強く感じた。(以上長谷)



JVCは現在、11の国・地域で活動しています。

# プロジェクト一覧

6月後半～9月前半

## ラオス

農業・農村開発／土地森林保全事業／  
洪水被災支援（サワナケート県）

6月中旬以降、活動村2村で魚保護地区の設置に向けて、GPSによる実測や規則の内容に関する検討を村人と進めた。また1村では、コミュニティ林の対象となる区域の樹木や林産物のサンプリング調査を実施した。農業技術研修の活動として、3村で稲作の害虫対策や施肥の研修を行うとともに、2村では6世帯に合計12頭の雌牛を提供して牛銀行を設置し、あわせて牛の健康管理のためのワクチン接種や牧草栽培の研修を行った。

この間進めてきた深井戸の新規掘削は7月に完了し、今季JVCが支援した全ての深井戸／浅井戸の水質検査

を行って異常のないことを確認した。村人が今後も井戸を持続的に使用できるように、各村で井戸修理のための基金設立をサポートした。8月下旬には、外部の専門家をラオスに招聘し、本プロジェクトの中間評価を行った。

8月末の台風上陸とそれに前後する集中豪雨の影響により、9月上旬にラオス南部で大規模な洪水が発生し、ピン郡の活動村でも多数の家屋や水田が大きな被害を受けた。これに対してJVCは9月7日から12日にかけて、



被災した村人に支援物資を届けるJVCスタッフ(写真左)

現地調査を行いつつ米、塩、水などの食料を村人に提供する緊急支援を行った。村人の苦しい今の暮らしを支えつつ、生活再建のための中長期的な支援を展開するべく、現在募金を呼び掛けている。ぜひとも皆様のお力添えをいただきたい。(岩田)

## スーダン／南スーダン

紛争による被災民の支援(スーダン・南コルドファン)／  
難民キャンプでのスーダン難民支援(南スーダン・イーダ)

政情不安を受けて6月にエチオピアに退避していた駐在員2名は、民主化に向けた暫定統治機構の設置が合意され、政治的緊張が緩和されたため、9月中旬にスーダンに帰任した。

◎教育支援(スーダン)：ウム・ドレイン郡クムにて校舎が完成し(1棟2教室)、草葺きの小屋を校舎として使用していた約130人の児童が、煉瓦造りの新校舎で学べるようになった。

◎平和構築(スーダン)：避難民地区の住民リーダーたちにインタビューを実施し、反政府側にいる家族や知り合いとの連絡の有無や、和平合意後に

引き起こりうる問題(土地、所有物、婚姻)について聞き取りをしている。今後は住民同士の意見交換の場としてワークショップを実施する。(今中)

◎難民キャンプ支援(南スーダン)：幼稚園のボランティア教員に対して実施する研修に先立ち、英語基礎クラスを開始した。全教員の約半分にあたる37人が参加しており、3か月実施される。また、保護者が不在の児童に対する小



ウム・ドレイン郡に新設された校舎では、11月(雨期後)の新学期から子どもたちが勉強を開始する

学校への復学支援では現在、夏季クラスを開催しており、24人の参加児童は英語や算数、野菜栽培などに取り組んでいる。

(山本)



## アフガニスタン

平和活動／識字教育  
(ナンガルハル県)



女性たちのピースワークショップ。家庭での争い事など身近な事例から学び合った

アフガニスタンの反政府・武装勢力タリバンと、アメリカによる和平交渉がカタールで続けられていたが、9月に入り中断し、先行きが不透明である。治安状況は引き続き非常に厳しく、各地で武力攻撃の事件が起こり、民間人の犠牲者も増え続けている。

現地パートナーYVOと共同で推進しているピース・アクションでは、これまでの活動地ナンガルハル県クズ・クナル郡だけでなく、県内の他の4つの郡でも平和と非暴力の学び合いワークショップを実施した。各郡での実施にあたっては、事前に窓口となる代表者の若者たちに向けたリーダー研修を行い、準備や実施、その後のレポート作成に協力を行った。

YVOスタッフがその場に行かなくてもワークショップが実施された村もあり、これまで以上に地理的な広がりや、主体性の強まりが見られた。特筆すべきは、ある村で初めてワークショップへの女性の参加が実現したことである。男女が同席することは難しいものの、男性トレーナーが女性の集まりに訪問することができた。(加藤)

## パレスチナ

若者のレジリエンス  
向上事業／栄養失調  
予防事業



おしゃべりを交えながら楽しそうに玩具作りのデモンストレーションをする保健促進員の女性たち

◎青少年のレジリエンス・地域保健の向上(東エルサレム)：7月～8月末は学校が夏季休暇のため、普段の保健委員会の活動はなく、パートナー団体・MRSの主催でサマーキャンプが行われた。MRSの医療ボランティアである若者たちのさらなる技術向上が目的とされ、その中には学校保健委員会出身の者もいた。環境問題に対するキャンペーン立案研修も行われ、参加者たちの目は真剣そのものであり、後輩たちの良き手本として今後も活動が期待されている。

◎子どもの栄養改善支援(ガザ)：現在実施している3年間事業はあと半年となり、保健促進員の女性たちが、栄養講習や玩具作りなどのセッションでリーダーシップを取り、積極的に活動を行っている。指導担当の保健師はサポート役に徹し、必要があれば補足を行っている。8月に行われた、脳の発達に良い玩具を作るセッションでは、これまで作った玩具の遊び方、そして作り方のデモンストレーションを行った。保健促進員たち自身も参加者の母親たちと会話をしながら活動を楽しんでいる様子が見受けられた。(大澤)

## イラク

国内での  
資金調達に集中



目標額を大幅に超えて達成できたクラウドファンディング

最近の活動資金不足に対処するため、またJVCのイラクでの活動を広く知っていただくため、インターネットによる募金活動(クラウドファンディング)に挑戦した。半年ほど前から準備を重ね、8月19日にスタートしたが、その数日前に担当のガムラが緊急出産となり離脱。また、当初ご寄付の集まりがよくなく、400万円の目標は無謀だったかと思う時期もあったが、その後大手新聞などにも取り上げていただき、徐々にたくさんの方からご支援をいただくことができた。9月27日には目標の400万円に到達、さらに10月1日には500万円を超え、10月3日の終了時には最終的に562万8千円のご寄付をいただいた。ご支援に感謝すると共に、責任の重さを感じている。

(中野)

## 国内活動

日本国内での  
活動資金調達／  
メディア露出



講談社などと主催した駐在員トークイベントの様子

期間内では、主催・出展・登壇イベントや講演を25回実施。大きな動きがあったスーダン情勢やTICAD関連のイベントのほか、GARDEN Journalism・講談社クワリエ・ジャポンと共催で、海外駐在員が勢揃いした海外本音トークイベントなどを開催し、好評を得た。

メディア掲載では、8月下旬に平壤で行われた交流が、東京MXテレビ「モーニングCROSS」に生出演にて取り上げられている。また、プロサバンナ事業を取り上げた9月4日の院内集会の模様が同7日放送のTBS系列「報道特集」で放映され、SNS上で14万回再生されるなど、注目を集めた。

その他、事業資金を調達するための夏募金キャンペーンを実施、9月末現在までに約560万円の寄付が集まっている(目標700万円)。次回は11月に冬募金キャンペーンのお知らせを発送予定(同1,100万円)。また、秋には朝日新聞の運営するサイト「A-Port」での小規模クラウドファンディングを予定しており、カンボジアのため池掘削の費用を集める予定。

また、2020年のJVC国際協力カレンダーが9月に販売開始となった。壁掛け・卓上合わせて1万3千部の完売を目標としている。加えて、年末大掃除に合わせた物品寄付や書き損じはがき収集のお願いなど、秋冬に実施する広報の準備を進めている。(並木)

## カンボジア

農村における  
生業改善支援

たい肥研修。事前に参加者が集めた牛糞や葉っぱを材料として使用している

3月にドンソック村に掘削した農業用のため池の近隣住民を対象に、7月初旬より、たい肥研修や苗木作り研修を実施し、貴重な食糧確保の手段となる家庭菜園実践のサポートを開始した。村で手に入りやすい牛の糞や落ち葉などを調合してつくる自然たい肥は住民の関心も高く、研修参加後、すぐに自宅のたい肥の調合を変える参加者も複数出ている。

8月下旬から9月は、事業地で特に冠水被害の出やすい時期であるため、対象村6村にてタイヤプランターや高設研修を実施し、家庭菜園への大雨被害が最小限に抑えられるような対策を実施した。こちらも研修後の実践率は高く、まだ実践していない農家を実践者の家に招いて実践者の生の声を聞く経験交流の時間も設けるようになった。

すでに自給を達成しており、野菜を外に販売したいという希望のあったコンサエン村の農家は、JVCの栽培研修を経て、7月から定期的にシムリアップのレストランにコリアンダーを卸し、定期収入を得ることが可能となった。「カンボジア産で自然たい肥」という点が先方に非常に好評である。

(大村)

## 調査研究

外務省・JICAとの  
政策協議／各種提言

モザンビーク小農リーダー(左)と市民社会メンバー

◎モザンビーク／プロサバンナ事業関連：2019年度 NGO・外務省定期協議会第一回 ODA 政策協議会（7月23日）に議題提案、専門アドバイザーの高橋が参加した。8月末に横浜で開催された TICAD VII（アフリカ開発会議）に関連して、モザンビークの小農リーダーおよび市民社会と、協働実績のあるカメルーンの小農リーダー（モザンビークと同様に土地収奪への抵抗運動を続けている）を招へいし、「TICAD サイドイベント」に参加、他団体と共同で「気候変動と家族農業」[SDGsとアフリカ開発?]と題するセミナーを開催した。9月4日には、外務省・JICAとプロサバンナ事業に関する政策協議を行い、また一般公開の院内集会を開催した。

上記の招へいについては、ウェブ記事、テレビ（日英／衛星・地上波）、ラジオのメディア出演につながった。特に、プロサバンナ事業に対する小農の反対の声を取り上げたテレビニュース動画が Yahoo 政治部門の映像アクセスランキングで1位となり、また SNS 上にあげられた動画だけで再生回数が11万を超えるなど大きな反響を得た。（渡辺）

## 南アフリカ

子どもケアセンター  
の運営支援

センターの敷地で野菜を収穫、子どもたちのために調理、提供し始めている

今年度から、親がいないなど厳しい家庭環境下に置かれた子どもに対して住民たちが適切なケアを提供できる地域づくりを目指して、新しいパートナー2団体（子どもケアセンター）との協働事業を開始している。センターは子どもの世話をする「ケアボランティア（2村20名）」が運営、計約250名の子どもたちが通っている。

ケアボランティア対象の菜園作り研修を4月に開始、6月下旬にはセンターの敷地内の菜園で野菜が収穫できるようになって、センターで調理、子どもたちに提供している。8月から9月にかけては、次期栽培の準備もかねて、収穫後の採種・保存と有機たい肥の作り方、苗作りの研修を行った。

6月半ばには、センターの日常的な活動を子どもたちが楽しめ、学べるものにするための「プログラム改善研修」を開始した。研修後に学びを日常的な活動に活かし始めている。1団体では、村内の保護者の協力を得ていくため、8月末、保護者20名とケアボランティア8名を対象に、子どものケアの方法を学ぶ研修を実施した。（渡辺）

## コリア

絵画交流『南北コリアと  
日本のともだち展』／大  
学生平和交流プログラム

「へいわのおまつりはじまるよ」ワークショップで完成した作品の前でポーズを取る子どもたち

◎『南北コリアと日本のともだち展』：8月中旬に、韓国・済州島で行われた「グローバル・ピースリーダーキャンプ」の中で、『ともだち展』の絵画展示と今年の共同制作「へいわのおまつりはじまるよ」ワークショップを実施するため、小中学生4名と事務局および学生ボランティアが参加した。日韓関係の悪化が顕著だった時期でもあり、保護者からも心配の声があがっていたが、「市民同士の交流は止めない」という『ともだち展』のスタンスを伝えて理解を得た。

◎大学生平和交流プログラム：勉強会として6月に第2回（関東8名参加）：日本の植民地支配を振り返る、関西（5名参加）：日本と朝鮮半島の近現代史、7月に第3回（関東・関西合同（13名参加）：朝鮮戦争と南北分断）を開催した。

本プログラムに参加している学生の中から9名が8月に訪朝し、平壤外国語大学の学生と交流した（本誌10ページ参照）。なお、帰国後には学生リーダーのメディア出演（東京MXテレビ）し、同行取材したTBSのニュース番組で平壤での様子が放映された。今後も報告会を予定。

(宮西)

# 「本で寄付」プログラム BOOK・OFF®



読まなくなった本や、聴かなくなったCD、  
使わないDVD・ゲームはありませんか？  
箱や袋に詰めて送るだけで、ご家庭の不用品  
が寄付になり、アジア・アフリカ・中東の  
人々の支援に役立てられます。

## 簡単申込 送料無料

ブックオフコーポレーション株式会社が買い取り、その代金の全額  
がJVCに寄付されます。さらに社会貢献活動の一環として、買取  
金額の10%が寄付に上乘せられます。ぜひご協力ください！

もうすぐ年末の大掃除  
読まない本が！  
寄付になる！  
CD、DVD、ゲームも無料で集荷  
断捨離で国際協力



### 4 ご寄付として お振込み

ブックオフでの査定が完了  
した後、買取金額の全額が、  
日本国際ボランティアセン  
ターにご寄付として振り込  
まれます。

### 3 無料で集荷

ご指定いただいた集荷日・  
時間帯に、運送会社のドラ  
イバーが無料で集荷にうか  
がいます。

ドライバーが、印字済みの専用集荷  
伝票を「箱数分」お持ちしますので、  
ご用意は不要です。

### 2 箱詰め

おひとりで持ち上げられる程  
度の重さ・大きさまでお願  
いします。

15kg以内(ひと箱あたり)を目安に  
して、箱詰めをお願いします。ご寄付  
いただけるのは「本・CD・DVD・ゲーム」  
となり、本なら30点以上、CD・DVD・  
ゲームなら5点以上よりお送りいた  
だけます。箱の数は最大19箱までです。

### 1 お申込み

「専用申込フォーム」から集荷  
のお申し込みを行ってくださ  
い。「箱数」「集荷日」が同時  
に予約できます。

「箱数」「集荷日」はお申し込み後の変  
更も可能です。前日までにブックオフ  
オンライン・カスタマーセンター(フ  
リーダイヤル:0120-25-2902)まで  
お問い合わせください。

#### 専用申込フォーム

[https://www.ngo-jvc.net/jp/  
form/hondekifu.html](https://www.ngo-jvc.net/jp/form/hondekifu.html)

上記URLか右のQRコードをご利用ください。



#### お問い合わせ先

買い取れる商品の種類などに関するお問い合わせ  
ブックオフオンライン・カスタマーセンター

☎ 0120-25-2902

「本で寄付」プログラムに関するお問い合わせ

JVC東京事務所

TEL 03-3834-2388 E-MAIL [info@ngo-jvc.net](mailto:info@ngo-jvc.net)

#### よくある質問

##### どのような商品を送っていいのですか？

ご寄付いただけるのは「本・CD・DVD・ゲーム」となり、本なら30点  
以上、CD・DVD・ゲームなら5点以上よりお送りいただけます。本プ  
ログラムでは、商品の状態が良好なものを買い取り対象としています。

買取基準の詳細は、ブックオフオンライン・カスタマーセンター(フリーダイヤル:  
0120-25-2902)にお問い合わせいただくか、ブックオフの買い取り基準一覧を  
お読みください。<http://www.bookoff-online.jp/alliance/kaitori.html>

##### 「本で寄付」のために近くのブックオフ店舗に 持ちこむことは可能ですか？

申し訳ございませんが、ブックオフ店舗へのお持ち込みは対象外と  
なります。必ず、当団体の専用お申込みフォームからお申し込み  
いただくようお願いいたします。

告知 メサイア・フェスティバル・クワイア 第1回公演

# 「歌って国際貢献」の精神を胸に 新しい「メサイア」を

メサイア・フェスティバル・クワイア代表 山口 省吾

私たちは、日本国際ボランティアセンター合唱団の設立に尽力された、アインス・バスカビルさんの「歌って国際貢献を」の精神を引き継ぎ、一昨年の12月から、新しい合唱団の立ち上げの準備を始めました。多くの方々のご協力、ご理解、ご支援をいただきまして、本年3月から練習を開始しました。4月の設立総会の議を経まして、本格的な活動に入りました。

21時まで、休憩もなくみっちり練習に励んでおります。12月13日の本番には、90名に及ぶ団員一同、心を込めて、心をお届けさせていただければと思います。お一人でも多くの方々に会場にお越しいただき、心で受け止めていただければ、誠にありがたいことと存じます。

今回は、今までお聴きになられたメサイアと一味違った「メサイア」をお届けできるのではないかと思っております。ぜひお楽しみにして、会場にお運びいただきますようお願いいたします。



メサイア・フェスティバル・クワイア 第1回公演  
ヘンデル作曲『メサイア』全曲(1754年版)

日時：2019年12月13日(金)  
18:30開演(17:45開場)  
場所：杉並公会堂 大ホール  
東京都杉並区上荻1-23-15  
チケット：3,000円(全席自由)  
お問い合わせ：080-6545-0777(山口)  
※このコンサートの売上の一部がJVCに寄付されます。

映画祭告知 第13回 国際有機農業映画祭2019

# 「足もと」から 今後の未来を考える映画を

国際有機農業映画祭運営委員会 大野 和興

国際有機農業映画祭は12月8日に都内の武蔵大学江古田キャンパス1号館(練馬区)で開催されます。今年で13回目。JVCには第1回から協賛いただいています。改めてお礼申し上げます。

上映作品はアフリカを舞台にアフリカで制作された映像が2本、フランスを舞台としたものが2本、それに映画祭運営委員会自主制作の『それでも種を巻くその後』の合わせて5本です。

アフリカの映像はセネガルで制作された『黄金の魚アフリカの魚』とブリキナファン制作の『ブルキナの恵み』。

いずれも大資本に翻弄されながら自分たちの村、土地、水、小さい農業や漁業を守るために悪戦苦闘する人々の姿を描いたドキュメンタリーです。

フランスの作品は、肉食を通して今の食のあり方そのものを問う『肉を食べてはいけないの?』と今の農業のあり方を問い直す『大地と生きる』。映画祭の自主制作映像は3・11直後に制作した作品のその後を追ったもの。

映画祭恒例の「野良語り」は星の谷ファームの天明伸浩さんと明石農園の明石誠一さんです。



第13回 国際有機農業映画祭2019  
日時：2019年12月8日(日)  
10:05 ~ 18:35  
場所：武蔵大学江古田キャンパス1号館  
1002シアター教室  
チケット：(一般)前売 2,000円/当日2,500円  
(25歳以下)前売500円/当日1,000円  
※中学生以下無料  
上映作品：記事参照  
公式サイト <http://www.yuki-eiga.com/>

# イベントあらかると

7月～9月

イベント・ピックアップ!

9/28(土)～29(日) 東京都江東区

## グローバルフェスタJAPAN 2019

2019年度広報インターン 守屋 亜純



今井代表もバカリ! 200食を売り切ったピタパンサンド

毎年、秋に開催されている国内最大級の国際協力イベント「グローバルフェスタ JAPAN 2019」。JVCは今年も物販ブースと食販ブースで出展しました。食販ブースは、2019年度インターンが主導で企画・運営し、スパイスで味付けされたチキンを中東地域で有名なピタパンにはさんだ「ピタパンサンド」とメキシコの「コロナビール」を販売しました。当日は天候にも恵まれ、用意していたピタパンサンド200食、コロナビール120本を完売することができました。結果、収支も黒字で終わることができ、ほっとするとともに達成感を感じています。本当にありがとうございました!

インターンが中心となった今回の食販企画ですが、順調に準備が進んでいたと言われれば、当日を迎えるまでには紆余曲折がありました…。最も時間がかかったメニュー決めでは、「JVCの事業地に関わりがある食材を使いたい」という思いから、中東で有名なピタパンを使うことに決めたままではいいものの、その中に何を入れるのかという壁にぶち当たりました。コロケに近い中東の揚げ物は調理が困難ということで却下、ポテトサラダも生野菜の提供が禁止されているので却下…、という具合に、最終的に「ケバブ用鶏肉」にたどり

着くまでに議論が尽きませんでした。その後も、ただのケバブでいいのかということで、オリジナルソースを作ることにになり、試作をしては事務所に来ている人に食べてもらう、という試行錯誤を繰り返し、最終的に「2種類のソースから選べるピタパンサンド」が完成しました。

当日は、実際に利益を出せるのかという不安もあったものの、多くの方に「おいしい!」とっていただき、最後までこだわってやって良かったという思いでいっぱいです。

インターン企画とは言っても、準備の段階から「パセリをかけたなら色合いが良くなるんじゃない?」「ソースはお客さんが選べたほうがいいよ!」など、多くの方にアドバイスをいただきました。準備段階から当日にわたって、インターンだけではなく、ボランティア・スタッフの皆さんが協力・応援してくださり、立場や事業に関係なく、協力し合える環境がJVCなのだ実感することができました。

これからインターン期間後半戦ということで、協力の輪をさらに強めて活動していけたらと思います。ご協力いただいた皆様、お買い上げいただいた皆様、本当にありがとうございました!!

### その他の主なイベント

7/7(日) 神奈川県川崎市【出展】  
2019インターナショナル・フェスティバル  
inカワサキ

7/12(金) 東京都千代田区【外部講演】  
南スーダン平和プロセスの課題と支援  
～TICAD 7を前にアフリカの平和作りを考える～

7/13(土) JVC東京事務所  
「国を持たない最大の民族」  
知られざるクルドの世界  
在日クルド人の方を迎えて、クルド文化や関連してイ  
ラクでの活動をお伝えするイベントです。

7/13(土) 東京都渋谷区  
キッチンの窓を開けて  
食の未来を探しに行こう  
身近な食べ物に関する関心や心配事について気軽に  
話せる場を設けるイベントを開催しました。

7/15(月) 東京都千代田区【外部講演】  
TABI LUNCH 食べて、知って、旅に出よう!

7/18(木)～28(日) 埼玉県さいたま市  
演劇「朝のライラック」  
パレスチナ現地駐在員の渡辺真帆が翻訳を担当した  
演劇が上映されました。

7/20(土) JVC東京事務所  
アフリカ、スーダンの今を知る

7/27(土) 東京都文京区  
海外で暮らす! 働く!  
NGO現地駐在スタッフの本音トーク  
JVCの海外駐在員が一堂に会してのトークイベントを  
ジャーナリストの堀潤さん聞き手にお迎えして開催  
しました。

8/3(土) JVC東京事務所  
ガザを歩いて見えるもの  
～封鎖下の人々の喜怒哀楽～

8/4(日) 東京都渋谷区【外部講演】  
スーダンの多様性、ヌバ山地の人びとと  
生活文化

8/6(火) 東京都渋谷区【外部講演】  
伝える人になろう講座  
～小さな主語で見たカンボジアの村の暮らし～

8/11(日祝) 東京都渋谷区  
映画「チェイシング・コーラル ～消えゆくサン  
ゴ礁～」上映会&トーク

8/24(土) 東京都新宿区【出展】  
パルシステム東京「ピースフェア2019」

8/28(水) 神奈川県横浜市  
アフリカの農民の声を聴こう  
セミナー「気候変動と家族農業」

8/29(木) 神奈川県横浜市【外部講演】  
SDGsとアフリカ開発?  
～私たちの暮らしから考える～

8/30(金) 東京都中央区  
日本人医師×JVC現地駐在員の最新報告  
「パレスチナ・ガザの支援現場から」

8/31(土) 京都府京都市【外部講演】  
今、アフリカで起きていること  
～私たちの食や暮らし、税金から考える～

9/4(水) 東京都参議院議員会館  
国連「小農権利宣言」「家族農業10年」を受け  
て考える日本の開発援助とアフリカ小農

9/15(日) 神奈川県横浜市【出展】  
国際平和映画祭

9/18(水) JVC東京事務所  
ラオス農村の暮らしと開発で失われる  
土地、森、川  
ラオス駐在の山室が一時帰国しての報告会を開催し  
ました。

9/20(金)～24(火) カンボジア・シェムリアップ州  
田舎暮らしを体験しよう!  
カンボジアスタディーツアー

9/28(土)～29(日) 東京都江東区【出展】  
グローバルフェスタJAPAN2019



## JVC なひと

### 「伝える」ことが私の国際協力

パレスチナ事業専属ボランティア  
小向 麻記子



左：筆者

JVCに関わって約4年、パレスチナ事業専属ボランティアになってから約2年になります。私は小さい頃の環境から、外国の人と偏見なく接することが自然と身についたと思います。自宅にいたイラン人たち、保育園で仲の良かった難民の子、小学校では来校される外国の方々との交流の機会がありました。

時は流れて大学受験の年に、米国内時多発テロ事件（いわゆる9・11）がテレビで生中継されました。当時の希望進路は、小さい頃からの憧れだった警察官。しかしあの光景を見て、国益を損なわず国を守るためにはどうすればいいのか、という思いが募り、それまでは漠然としていた「国際関係に関わってみたい」という思いが、私のなかで確実なものになりました。

なるべく現地の人と触れあいました。当時の仕事の苦しみと国際関係への思いにアガっていたとき、JVCのホームページを検索で見つけていました。最初はカレンダー発送のお手伝いで、そのうちにパレスチナ事業のお手伝いを任されるようになりました。

今ではその専属ボランティアとして、スタッフの事務作業の補佐、長年デザインの変更がなかったパレスチナ刺繍製品のデザイン変更、イベントの企画／開催などを行っています。刺繍製品のデザインでは、既存の顧客層ではない若い人や男性にも手にとりやすいように工夫しています。イベントでは、パレスチナを知らない／知りたいけど一歩踏み出せない方を対象に、現地のことを学べる少人数制の勉強会イベントを開催しました。

最後に、私にはJVCスタッフのよさに講演会をしたりする力はありません。ですが、小規模のイベントならば企画／準備から来てくださった方をお見送りすることまでできます。今後、パレスチナに初めて触れる機会となるようなイベントを企画して、パレスチナを伝えていきたいと思っています。

## おすすめ本

### 『貧しい人を助ける理由 遠くのあの子とあなたのつながり』

デイビッド・ヒューム著／佐藤寛 監訳  
日本評論社 2017年11月 1700円(税抜)  
事務局次長 細野 純也



「なぜNGOで活動されているんですか？」この業界にいるとわりとよく聞く質問だ。答えは回答者の数だけあっていいものだし、私も慣れたもので「相手が理解しやすい」ようなストーリー仕立てですらすら答えてしまつことも多い。

イギリスを代表する開発研究者である筆者による、なんともストレートなタイトルの本書は、「金持ち国」(本書内の表現)に暮らす私たちのような人びとが、他国の貧困下にある人びとに対してどのように考えるべきなのか、について書かれた本だ。

世界の開発援助を巡っては、昔から様々な議論がなされている。「援助は役立つ／逆にもつとやるべきだ」「誰が気候変動の責任を取るべきなのか」「これほど巨大な格差を生む経済システムがなぜ止されないのか」といったものだ。本書の良い点は、そうした主要な議論を豊富な引用とともに紹介しその流れを整理してくれる点だ。そして最近の本であるために、近年世界中で蔓延している「ポスト民主主義」や「自国民第一主義」も視野に入れてフォローしてくれている。

分厚いものが多い開発援助の書籍のなかでは厚さ1センチとかなり薄く、それでいて多くの議論を盛り込んでくれているので、近年の援助業界の概要を広くおさえたい、というニーズにも十分に当てはまる。巻末には、日本における開発援助の文脈と書籍の内容とを結びつける監訳者による補足説明と、より深く知るための読書ガイドがあることもありがたい。

開発援助の側にいる筆者による本なので、もちろん「このままの状態」を是とせず、変化を促すための提案が序文と最後にまとめられている。そこに描かれている事柄はそれこそ果たして実現可能なのか、と思えるような壮大なものだ。しかしそこまでに本書で様々説明されてきた過程を踏まえれば、前向きに捉えることもできるかもしれない。

貧しい人を助ける理由、もしくはなぜNGOに関わっているのか。それは、大所高所からの論理や「金持ち国の義務」のような大きな主語でなくともいい。本書は、「私」にとっての理由を改めて考えるきっかけとヒントを与えてくれる良書である。

## お知らせ

### 投稿募集中

JVCや会報誌に関するご意見・ご希望をお寄せください。  
また、「JVCなひと」への自薦寄稿も大歓迎！JVCの会員になっ  
たきっかけや最近の関心事、ほかの会員の皆様へ伝えたいこと  
など、800字以内でお送りください。  
皆様からの投稿をお待ちしております！

【投稿先】 会員担当 横山まで  
Email : yokoyama@ngo-jvc.net  
FAX : 03-3835-0519

### 「夏の募金」報告 ※指定寄付/無指定寄付すべてを含みます

2019年「夏の募金」へご協力いただき、ありがとうございました！

6月20日～8月31日 集計

691件 6,117,833円

### 募金集計

募金にご協力ありがとうございます。  
JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。  
JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指定先	期間（6～8月）
無指定	14,606,824
タイ	1,500
カンボジア	1,677,167
ラオス	114,200
南アフリカ	74,500
アフガニスタン	453,787
イラク	36,560
スーダン/南スーダン	315,193
パレスチナ	2,613,013
コリア	43,600
東日本大震災	42,000
国内震災	1,000
モザンビーク緊急支援	631,507
みどり一本	147,446
東京管理	1,500
調査研究	116,698
広報	25,660

合計 20,902,155円

※上表に「季節の募金（夏/冬/春）」も含まれます。

### アフガニスタンから パートナーNGOの スタッフが来日！



YVO代表 サビルラー



YVOスタッフ アジマル

今年の4月から現地化したアフガニスタン事業のパートナーNGO団体「YVO (Your Voice Organization)」。10月末と11月に、それぞれスタッフが来日します。

紛争が続く同国で、彼らが何を思いながら平和のための活動を続けているのか。現地の生の声を聞ける貴重な機会、イベントにもぜひお運びください。

11/20に東京、11/22～23には沖縄での講演を予定しています。

詳しくはぜひウェブサイトをご覧ください！

### 人事

#### 異動

大澤 みずほ バレスチナ事業担当  
(エルサレム事務所現地駐在員より：9月1日付)

渡辺 真帆 エルサレム事務所現地駐在員  
(パレスチナ事業担当より：9月1日付)

### 編集後記

法務省の入管収容施設に収容されている外国人の取材を重ねている。被収容者の約3分の2は難民認定申請者。申請が不許可となり強制送還命令が出ても、母国で迫害が待つ以上は誰もが帰国を拒んでいる。被収容者の多くが2、3年超の収容を強いられ、家族との面会もアクリル板越しで30分だけで、1日6時間の自由時間以外は6畳に5人が押し込められ、抑うつ状態に陥っている。難民は遠い国だけではなく、足元にもいる。今後も付き合わねば。(櫻)

# TRIAL & ERROR

JVC  
国際協力  
カレンダー

JVC  
スマイル  
年賀状

「気軽にできる国際協力」に  
ぜひご参加ください！

収益はJVCの支援活動に役立てられます。

*Funu Te Varovaro*  
トゥム・テ・パロパロ  
幸せの音が響く島  
JVC CALENDAR 2020  
著者 竹沢うるま

このカレンダーの収益は国際協力に役立てられます

## JVC 国際協力カレンダー



2020年は「幸せ」がテーマです。  
クック諸島からみなさまに  
「幸せのおすそわけ」

↑卓上カレンダー



↓壁掛けカレンダー

## JVC スマイル年賀状

今年も活動地の子どもたちが描いてくれました！



スマイル年賀状の絵柄は全部で5種類です。

同封のチラシ（ハガキ）での購入の他にインターネットでもご購入いただけます。詳細は本誌同封のチラシをご覧ください。

## JVCでは会員を募集しています

会員数（10月1日現在）合計927名（正会員529名 賛助会員498名）

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年4回この会報誌と年次報告書をお届けします。入会のお申し込みや、会員の方の住所変更などは会員担当の横山まで。

メールアドレス yokoyama@ngo-jvc.net

- 一般会員 10,000円
- 学生会員 5,000円
- 団体会員 30,000円

それぞれに正会員と賛助会員があります。

## JVCのオリエンテーションにお越しください

活動内容をご紹介します  
説明会（オリエンテーション）の  
詳細・お申し込みはウェブサイトから

- 会場 JVC東京事務所
- 参加費 無料



特定非営利活動法人  
日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

ウェブサイト <https://www.ngo-jvc.net/>

メールアドレス [info@ngo-jvc.net](mailto:info@ngo-jvc.net)

Facebook [NGOJVC](#)

Twitter [@ngo\\_jvc](#)

Instagram [@ngo\\_jvc](#)

◎発行 = 日本国際ボランティアセンター（JVC） 〒110-8605 東京都台東区上野5-3-4 クリエイトティブOne秋葉原ビル6F TEL 03-3834-2388 FAX 03-3835-0519

◎発行人 = 今井高樹 ◎編集人 = 大野和興・長谷部貴俊 ◎編集スタッフ = 櫻田秀樹・並木麻衣・細野純也

◎デザイン = 渡部健 ◎印刷 = 株式会社ベスト・プリンティング

本誌の記事・写真などの無断転載・複写を禁じます。